

いきいき 行人

笛の音に心奪われた雅楽に

今なお心躍る

波多野 光政さん (67歳・藤原町)



今回紹介するのは忍雅楽会の代表を務める波多野さんです。愛知県で生まれ育った波多野さんが雅楽の世界に足を踏み入れたのは20歳のときでした。「18歳で上京し、自動車部品メーカーに就職しましたが、趣味も無く手持ちぶさたな余暇を過ごしていました。そんな生活が2年ほど続いたころ、どこからともなく笛の音が聞こえてくるようになり、その心地よさに心を奪われるようになりました。どうしてもこの音色を奏でみたいと思い、笛の音が聞こえてくる家を訪ねると、なんと笛を吹いていたのは宮内庁で雅楽を演奏する楽師だったんです」波多野さんの熱い思いを感じてか、楽師は快く指導を引き受けてくれたそうです。

吹奏楽の経験を持つ波多野さんですが、音符ではなくカタカナで記されている雅楽の譜

面にあぜんとしたそうです。「初めは分からないことばかりで、楽師の指使いを見様見まねする日々でした。徐々に曲を覚え音が出せるようになると楽しくなり、仕事から帰ると予習復習に励み、夏には家のベランダで星空を眺めながら練習しました」と駆け出しのころを回顧します。そして笛を習い始めて5年後、舞も習い始めた波多野さんは、雅楽器の独特な音と旋律に合わせた舞を覚えたことで、さらに雅楽の奥深さを実感したそうです。

東京都内を中心に活動する雅楽団体に所属し主要な存在となった波多野さんは、平成元年に行田市へ転入してからも活動を続け、平成20年に忍雅楽会を結成し「みらい」で演奏会を開催しました。「笛を習い始めて45年の節目を迎えたことと退職の記念にと活動仲間から提案を受けて行った演奏会には、愛知県から同窓生も駆け付けてくれました。これをきっかけとして卒業した小学校へ50数年ぶりに赴き、雅楽を披露することもできました。全校児童を前に舞を演じられたことは一番の思い出です」と感無量の様子。これからは市内の学校などで子供たちに雅楽を見てもらい知ってもらおう活動ができたらと目標を語る波多野さんは、今月21日に「みらい」で開催する雅楽演奏会で市内バレエ団体との異色のコラボレーションを計画するなど、新たな雅楽の形を模索し伝統文化を広める活動に心躍らせています。

私の作品

俳句

◎皆さんの作品を募集しています。
◎俳句は毎月5日までにはがき・封書
で広報広聴課へご応募ください。

明日掃くと枯れ葉の庭を黙視せり
佐間 根岸 克美

老友の愚痴の聞き役日向ぼこ
向町 佐藤 猶子

夜祭りの終り武甲の山凍てり
向町 斉藤 敏行

愛犬も我も老いたり冬の朝
行田 松村 照子

一枚の遺墨となりし賀状かな
行田 門井 美豫

山茶花の散り急ぐかにはらはらと
齋条 小林 英与

冬麗ら幼な子肩に若き父
白川戸 大熊みつ子

冬帽子実兄愛用を被り逝く
桜町 大塚 保子

いちどきの時間追わゆる十二月
長野 内山 計江

しべるるや暖簾の奥に客ひとり
持田 成田 国利

陽を入れて光を落す氷柱かな
門井町 森下さとし

小春日や老いの迷子のアナウンス
清水町 松岡 博

年賀状一枚つつのあたたかさ
中里 鯨 美智子

日向ぼこ吾にも幼き一時あり
本丸 関 常子

冬ざれや塚により添う碑の傾ぎ
荒木 藤田 栄之

『鉢力バー』(木工)
大川 孝治(埼玉)

